

マラヤ大学 オンライン研修 体験報告書 (2021 年夏)

SoSHIP

(Social Science and Humanities Immersion Programme)

鈴木葵・木村陽来・新井綾乃・清水悠乃・丸山満ちる

目次

1.マラヤ大学の紹介.....	3
2.プログラムの概要.....	3
1) プログラムスケジュール.....	3
2) 授業科目.....	4
3) Activities & Ceremonies.....	6
3.プログラムのハイライト.....	8
4.体験・学習成果.....	10

1. マラヤ大学の紹介

首都クアラルンプールに位置し、マレーシアで最初に設立された大学である。また、マレーシア最高峰の大学でもあり、QS アジア大学ランキング 2021 では 9 位、QS 世界大学ランキング 2021 では 59 位にランクインした。17 の学部がある。マラヤ大学の学生であるバディによると、ほとんどの講義は英語で教えられているが、マレーシアについての講義や、マレー語についての講義はマレー語で教えられている。

2. プログラムの概要

1) プログラムスケジュール

Social Sciences and Humanities Immersion Programme (以下、SoSHIP)は、マラヤ大学が主催する学習プログラムである。授業は、マラヤ大学の講師により、英語で行われる。また、ジェンダー論、政治学、などの人文科学系の科目が主である。今回、2021 年夏のプログラムは、8 月 9 日から 8 月 27 日までの 3 週間にわたって行われた。またその他にも、7 月 15 日の事前研修、8 月 7 日の Orientation、8 月 28 日の Closing Ceremony、8 月 30 日の事後研修などいくつかの出席するイベントがあった。部活やサークル他、用事がある人はスケジュール管理に気を付けよう。

日本人学生は、Seminar Series と Malaysian Studies の 2 つの必修科目のほか、選択科目を 2 つ選び、受講した。下記に SoSHIP の授業スケジュールを掲載しているが、すべての科目を受講するわけではない。選択科目は希望した授業が必ず開講されるわけではなく、選択段階では、下記の Gender Studies、Politics and International Relations、Media and Society、Film Studies のほかに 2 つの科目があり、全部で 6 つの科目から選ぶようになっていた。科目の種類や数、またタイムテーブルなどは昨年とは少し異なっていた。

SOCIAL SCIENCES AND HUMANITIES IMMERSION PROGRAMME - SOSHIP (VIRTUAL VERSION)

Time Day	08.30 – 09.30	09.30 – 10.30	10.30 – 11.30	11.30 – 12.30	12.30 – 13.30	13.30 – 14.30	14.30 – 15.30	15.30 – 16.30	16.30 – 17.30
Monday	Gender Studies		Break	Film Studies		Break	Activities with i-Smart Buddies		
Tuesday	Politics and International Relations			Media and Society					
Wednesday	Film Studies			Seminar Series					
Thursday	Media and Society			Politics and International Relations					
Friday	Malaysian Studies			Gender Studies					
Saturday									
Sunday									

2) 授業科目

授業は以下の6つである。各授業の内容および、課題について次の通りに記す。

- ・ Seminar Series
- ・ Malaysian Studies
- ・ Gender Studies
- ・ Politics and International Relations
- ・ Media and Society
- ・ Film Studies

Seminar Series

この授業は週に一度、毎回異なる講師による様々なトピックについての講義だった。成績評価のためのテストやレポートはなく、以下の内容について学んだ。

第1回：“The Truly Asian”（講師：Sir. Mohd Fairus Bin Sulaiman）

第2回：“Japanese as a Foreign Language in Malaysia”（講師：Dr. Woo Wai Sheng）

第3回：“Turning Stress into Positive Vibes”（講師：Ms. Aina Mardhiyyah Mohamad Noor）

講師は皆とても優しく、日本語が流暢な先生もいた。それぞれの国の文化や教育などについて、オープンなディスカッションが多く、参加者は気楽に発言することが求められた。

Malaysian Studies

プログラム参加者の必須科目で、授業は週に1回行われ、マレーシアについて学んだ。第1回目はマレーシアのマナーについて学んだ。礼儀作法や日常的な習慣の例が多数挙げられた。第2回目は結婚や衣服に関して、民族グループごとの違いにも触れながら説明を受けた。第3回目では住居や芸術に加え、観光地や料理など多岐にわたる話題が取り上げられた。Q&Aセッション以外は、講義は一貫してレクチャー形式で行われ、課題提出もなかった。

Gender Studies

この授業ではジェンダーアイデンティティや、性別役割分担(男女分離)、男女の教育格差、医療格差、宗教から見たジェンダー、男らしさ女らしさ、などのジェンダー論を学んだ。

授業ごとにスライドがLINEグループに送られ、そのスライドに沿って教授が説明していく。突然質問されることもあった。授業中は主に、スライドの説明に対する自分の考えや授業の最後に見せられるジェンダーに関する動画の感想を聞かれたり、スライドの音読を頼まれたりした。

教授の話す英語が少しマレーシア訛りなので、これまでアメリカ英語を学んできた日本人の私には聞き取りづらかったが、決して早口という訳では無かった。授業の半分が終わる

と休憩が10分入った。

第3回の授業と第6回の後に Google Form でのテストがあった。2回とも最初は正誤問題であった。その後、1回目のテストでは穴埋め問題が続き、2回目のテストでは授業で触れた内容に対する自分の考えを100文字以上で述べる記述問題が4問ほど続いた。テストの量的には、2回目が少し多く感じたが、難易度的にはさほど難しくない。スライドを熟読すれば、問題なく解くことが出来た。

この授業は課題などは無かったが、欠席すると出席の代わりとしてA4一枚分のエッセイの提出が求められた。ただ、エッセイのトピックは授業内容に関するものであれば何でもよいため、そこまで負担にならなかった。

Politics and International Relations

選択科目の1つであり、授業は週に2回行われた。インストラクターのレクチャーの後にディスカッションを行う形式だった。評価はディスカッションへの貢献度、小テストと最終テストで行われた。内容としては国際関係という言葉の定義に始まり、30年戦争から冷戦までの近代国際社会の変遷、思想家やその主義・主張などがあった。ディスカッションに加え、クラスを2つのグループに分けてディベートをする機会も設けられた。講義後には授業スライドと講義ノートが配布された。

Media and Society

この授業では、コース名の通り「メディアと社会」とりわけ現代社会における様々なメディアのもたらす社会的影響について学んだ。堅い講義形式ではなく、提示されたトピックについて参加学生が互いに意見を出し合うディスカッションの時間が多かった。これには積極的な参加が求められ、マレーシアと日本それぞれの視点から繰り広げられる議論は大変興味深かった。授業以外に、小テストが2つ、エッセイとそれに伴うプレゼンテーションが1つ、そして最終回にまとめの試験が課された。

[コース内容は以下の通り：]

Topic 1: "An Introduction to Media and Society"

Topic 2: "Glocalization - Learning from Media Theories - "

Topic 3: "Media Violence / Effect of Media Violence - The matter with Disney - "

Topic 4: "Sexual Explicit Media Content and its Effects - The matter with Netflix - "

Film Studies

この授業は、映画や映像について学んだ。映像を撮る上での画角や光の加減などを学んだ。具体的には、最初の1,2,3回目の授業で、宿題として自分の一日のルーティンを編集して一つの動画にし、その動画のおおまかな流れを説明するストーリーボードを作成した。そして、授業内で生徒一人一人の動画とストーリーボードについて、全員でそれぞれ感想や意

見を述べた。

4 回目の授業では、指定されたストーリーボードの映画の中で最も好きなシーンと嫌いなシーンのスクリーンショットの提出が課された。そして、授業でスクリーンショットをしたシーンを選んだ理由をそれぞれ発表した。

5 回目の授業では、自分の好きな映画を視聴し、その中から好きなシーンを二つ選び、そのシーンのカメラのアンングルや光の加減などを見てどのように感じたかをまとめることが宿題であった。授業では各自がその宿題を発表し、教授や他の学生から意見や感想をもらった。

最後の 6 回目の授業では、バディと一緒に一日のルーティンの動画とそのストーリーボードを作成することが宿題であった。これも、今までと同様に各自(各二人ペア)がストーリーボードと動画を説明しながら発表し、意見や感想をもらった。

授業は上記で述べた通り、各自の宿題の発表が殆どであったが、たまに映画学についての動画を見たり、教授から幾つか質問を受けたりすることがあった(ASMR についてどう思う? など)。この授業はこのように殆ど毎回宿題があり、動画編集などに慣れてない人にとっては少し大変であったかもしれない。また、映画を見ることが前提となってくるので、映画を無料で見られるコンテンツを持っていない人、金銭面で負担を負いたくない人にはおすすり出来ない。しかし、映画学は大学によっては学べる機会がなかなか無く、内容自体も非常に興味深いので、この授業を受けて損はない。

教授の英語は一貫して聞きやすく、質問が聞き取れなかった場合は、聞き返したり、お願いしたりすれば、何度でも質問をゆっくり言ってくれた。

3) Activities & Ceremonies

授業以外の活動について紹介する。

- Activities with i-Smart Buddies
- Orientation & Opening Ceremony
- Closing Ceremony

Activities with i-Smart Buddies

事前に送られてきたスケジュールでは、毎日 3 時間開催されるかのように書かれていたが、実際はそうではなかった。今回は、週に月・水・金の 3 回開催され、16:00~17:30 (日本時間) に行われることが多かった。

全 9 回のうち、アイスブレイクやゲームが 4 回、文化交流が 2 回、マレーシアおよびマラヤ大学のバーチャルツアーが 3 回であった。

文化交流では、お互いの食文化と伝統衣装について紹介した。実際に手元に用意して見せ合うことで、お互いの文化を学ぶことができた。バーチャルツアーでは、マラヤ大学のキャン

パス・マレーシアの街・バディの出身地を紹介してもらった。バディが動画やプレゼンテーションを用意してくれ、その魅力を十分に堪能することができた。

Orientation & Opening Ceremony

8月7日（土）の11:00～13:00（日本時間）に行われた。まず、マラヤ大学や SoSHIP についての説明を受けた。その後、バディと3つのゲームを通してアイスブレイクをした。

Closing Ceremony

8月28日（土）の11:30～13:30（日本時間）に行われた。先生やバディから労いやお別れの言葉を頂いた。また、それぞれが感想を述べて3週間を振り返った。

3.プログラムのハイライト

特徴的な講義スタイル (経済学部2年 鈴木葵)

私が履修した、Politics and International Relations (以下 Politics and IR) と Film Studies は、学生が授業の主役であることを強く感じさせるものだった。Politics and IR のクラスではほぼ毎回の講義でディスカッションの時間が設けられ、その日の授業の発展的な内容を議論した。それに加え、2 グループで対立してのディベート型講義もあった。Film Studies のクラスは事前に示されていた課題に沿って、成果や自分の考えなどを全体で共有するように構成されていた。どちらのコースも、学生自身の視点に重きが置かれ、それらの積極的な発信が不可欠であったため、インストラクターのレクチャーによる一方的な講義スタイルではなく、学生自身が授業をつくり出すという能動的な学びの場が実現していた。したがって上記の2つのコースは双方向の活発な意見交換という点で、画期的な授業形式だと感じた。

ディスカッションの時間での交流 (工学部2年 木村陽来)

Politics and International Relations のディスカッションの時間は、授業の中でも記憶に残るものだった。それは、今回、私が受講した科目では、学生同士が授業中に交流する機会があまりなく、ディスカッションが交流手段として機能していたためである。ディスカッションの時間では、学生たちは活発に主張をし合った。よって、通常のリラックスした雰囲気の話し合いとは異なる趣の交流ができた。また、マレーシア側の学生は、私たち5人に対応するバディ5人のほかに、3人の学生が参加していたが、その3人の学生とは関わる機会が少なかった。ゆえに、ディスカッションは彼らとの貴重な交流の時間だった。さらに、与えられたテーマについて話し合うのでスムーズに交流ができ、初対面の人同士で話題が見つからない、ということもなかった。このように、本プログラムではディスカッションの時間が印象的であり、交流手段としての重要性を強く意識させられた。

バディについて (法学部2年 新井綾乃)

このプログラムでは、生徒一人一人に現地のマラヤ大学のバディがつく。プログラム開始一週間前程から連絡がとれる。

バディは自分がとっている授業に生徒として一緒に参加してくれるため、授業や宿題に関する質問にも答えてくれる。また、代わりに教授とコンタクトをとってくれたりするので、質問があったらすぐに聞いた方がいい。質問が無いとむしろ心配のLINEがくる。

プログラムに参加する人数次第では、現地の学生や他の日本人学生に相談しづらかったり、コンタクトをとりにくかったりする可能性があるなか、現地の人とペアを組めるのは、プログラムに参加する上で大変心強いものであった。留学経験(オンライン含め)が無い人にとっては、プログラムの内容によっては、英語力や国際交流経験に不安を感じて、参加する勇気が出ないかもしれない。しかし、このプログラムでは、バディがついてくれるため、安

心してプログラムを楽しむことができるので、是非臆することなく参加してほしい。

因に、他の日本人参加者が言っていたことではあるが、バディとインスタグラムを交換しておく、プログラム終了後も程よい距離感でお互いの近況を知ることが出来る。

Media and Society: An eye-opening course (法学部 1年 清水悠乃)

「ユウノ、メディアの暴力コンテンツはどの程度視聴者の思想や言動に影響を与えている？」「…では、なぜ日本のメディア（報道、ドラマ・映画、CM等）は他国に劣らないくらい暴力を含むコンテンツが多いのにも関わらず、日本社会における犯罪率は世界の中でとても低いと思う？」

授業中に不意に投げかけられたこれらの質問に、私はすぐに返答することができなかった。おそらく今まで一度も考えたことがなかったからだ。頭の中では何と無しに概観を捉えていても、それを言葉にして説明するのは初めてだった。Media and Societyの授業では、このように新たな切り口でメディアと社会のあり方・関係性を詳しく見ていくことで、社会に対する視野を広げ、知見を得ることができた。報道や社会学、教育に興味を持っている人にはぜひこのコースを受講してもらいたいと思う。冒頭の質問についても、このコースを通してじっくり学んでいただきたい。

異文化理解：ヒジャブをどう捉えているか？ (理学部 1年 丸山満ちる)

SoSHIPでは、日本人学生1人当たり現地の大学生が1人ついて、3週間絶え間なくサポートしてくれる。そのバディが「もっと交流をしようよ！」と言って、授業やActivity以外にお喋りをする時間を設けてくれた。1対1で話すことで、文化や宗教の理解についてよい経験が得られたので、その時のことを書こうと思う。

イスラム教を信仰する女性は、ヒジャブという布で頭や首を隠すことが多い。これに関して、どこかで読んだ「ヒジャブは女性に対する抑圧である」という批判がずっと心に引っかかっていた。しかし実際に聞いてみると、もう慣れているので窮屈に感じることはなく、ファッションの一部として楽しんでいるのだという。また、ヒジャブの色は洋服と合わせたり、その日の気分を変えたりしているそうだ。確かに、彼女らは毎日のように色の違うヒジャブを身に付けており、とてもお洒落だった。

ヒジャブのことを知識として学ぶのももちろん重要だが、本音で話せる友達を通してイスラム教に触れたのは、とてもいい経験となった。彼女がヒジャブをどう捉えているかは、実際に話さないとわからないからだ。このように、身をもって異文化に触れることができてとても良かった。またオンラインでも、お互いの価値観や意見を共有できるほど仲の良い友人を作れたので、とても嬉しかった。

4.体験・学習成果

経験から得た意識の変化

経済学部 2年 鈴木葵

マラヤ大学によって提供された SoSHIP プログラムは、マレーシアの多民族国家という特徴が色濃く反映されたものだった。そのような文化的背景に加え、コース内容やバディ制度など、独自のプログラム構成は、多文化社会を経験する機会と、主体性に代表される意識の変化をもたらしてくれた。

多種多様な講義や現地のバディとの交流は、多様な文化を抱擁するマレーシア社会についての豊富な知識を提供してくれると同時に、新たな視点が得られた貴重な経験だった。Malaysian Studies と Seminar Series ではマレーシアの民族構成や使用言語の他にも、文化という単語に内包されるような、生活習慣、衣食住、結婚、芸術、観光といった幅広い分野について学んだ。授業外活動であるアクティビティでは、現地のバディが制作してくれた動画やプレゼンテーション、オンラインツアーによって、ローカルな情報を楽しみながら学んだ。どちらにおいても、マレー・中国・インド系やポーランドなどの東欧から流入した文化が共存している様子を実感した。また、現地学生と共に講義を受けることで、日本人学生以外の考え方を知る機会も十分にあった。特に印象的だったのは Politics and International Relations のクラスで「この教科 (Politics and IR) を学ぶことは重要か」という問いについて話し合ったときだ。過去の失敗を繰り返さないために重要だとする考えが主流であった一方、マレーシアの学生が示した、理想主義や現実主義といった各思想の変遷と歴史的背景の関連性など学術的な対象として研究する価値があるという考えに新たな気づきを得た。

講義やバディとのアクティビティは、主体性を培うことにもつながった。私が選択した Politics and IR と Film Studies はディスカッションに十分な時間が割り当てられた。前者で行われたディベートでは、現地学生の勢いに圧倒されるときもあったが、バディのサポートもあって積極的に参加できた。後者の授業では学生個人の発表を基に意見交換が進められるため、積極的な発言が求められた。自分の意見を即座に表現することに難しさを感じたが、参加者全員がそれに理解を示してくれたので、あまり躊躇せずに発言することができた。授業外活動でも主体性の大切さが認識された。アクティビティの際も活発な交流をすることで、オンラインという障壁を軽減することにつながった。特に私のバディになってくれた学生とは 1 対 1 のチャットやミーティングを通じて、より一層の信頼関係を築くことができたと思う。オンラインであっても積極的に交流することで、一過的なものにとどまらない友好関係の構築が可能であると実感した。

プログラムを経て、物事に主体的に取り組もうという意識が高まった。そしてその行動力を土台とし、今後も様々な経験から多くのことを学んでいこうと思う。最後に、中心となって活動してくれたマレーシアのバディの皆さん、充実した時間を共有できた日本人学生の皆さん、そしてプログラムの運営に携わってくださったすべての方々へ感謝したい。

英語の障害と、交流の楽しさの中で得た成果

工学部 2年 木村陽来

ここでは、プログラムを通して、特に私の印象的な体験と、プログラムから得た学習成果を記したい。体験の面では、主にマレーシアの人々との英語でのコミュニケーションの苦勞と、徐々にマレーシアとその国で暮らす人々について知っていく過程が記憶に残っている。また学習の面では、人と関わるうえで、受けた分の誠意は返す、という気概を学んだことが大きな成果であった。

英語でのコミュニケーションは混乱することが多かった。今回、バディとは主に LINE で連絡を取ったのだが、私は LINE 上で英語を用いて会話をするのが初めての経験だったので、まず英語をタイプするだけでも手間取った。後にわかったことだが、私がタイプに手間取り、返信が遅くなっていたせいで、バディは、「私が過剰に連絡するせいで、返信するのが億劫になっている」と思っていたらしい。また、授業の連絡などもすべて英語で伝えられるため、日本語の文章より意味をすべて把握するのに労力がかかり、授業やアクティビティの連絡などを見落としてしまうことが多々あった。このように、些細な問題に思えることでも、振り返ってみると、コミュニケーションの障害となっていた、と感じた。さらに、授業でも、英語がしばしば理解の妨げになった。講師が画面上にスライドを表示するとともに、口頭で説明する、という授業がほとんどであり、スライドを見なければ、今、何について話しているか、が把握できないが、スライドを見ていると、講師の説明が頭に入ってこない、という問題が起きた。そのような場合には、授業後に授業内容についてインターネットで調べ、なるべく内容を理解するように努めた。

以上のように、英語でのコミュニケーションは日本語のようにはうまくいかず、英語がスムーズなコミュニケーションや授業理解の妨げとなることが多々あった。しかし、今まで関わったことのないマレーシアの人々と交流し、彼らについて徐々に知っていったことは楽しい体験だった。プログラムを受ける前の私のマレーシアについての知識は、熱帯、イスラム教徒が多い、首都クアラルンプール、という程度のものだった。何しろ、普通に生活していたらマレーシアの人々と関わる機会は少なく、東北大学には留学生も多いが、私にはマレーシアからの留学生と話した経験はない。このように、私にとって、マレーシアの人々は関わりが薄かった。しかし、プログラムを通してマレーシアで暮らす人々のイメージが具体的にになっていき、その過程が非常に楽しかった。まとめると、英語でのコミュニケーションは苦勞が多かったが、今まで関わりのなかった人々について学んでいく過程を楽しむことはできた。

次に、本プログラムを通じた学習成果について示す。マラヤ大学側のバディたちは、普段の授業の中で私たちをサポートしてくれたほかにも、Opening Ceremony や Closing Ceremony でメッセージ動画を用意してくれたり、授業後のアクティビティでは、毎回丹念に準備をして、マレーシアや中国、イスラム教の文化を紹介してくれたり、このプログラム

にかなりの時間と労力をかけてくれた。しかし、私はそれに見合うほど、マレーシアの人々と積極的に交流することはできなかったのではないか、と思う。この反省を生かし、してもらったらお返しをする、という恩返しのような精神をこれからの日常生活では大事にしていこう、と考えた。

振り返ると、私は、コミュニケーションの面では混乱することが多々あったが、自分にとってのプログラムを受けた成果は得られたように思える。それも大部分は、十分に準備をしてくれた講師やマレーシアの学生たちのおかげであり、それらの方々に感謝したい。

留学を通して

法学部 2年 新井綾乃

このプログラムに参加した理由は、授業がない夏休みの間に、語学力を向上させることであった。そして、留学に興味のある学生と繋がり、将来国際的に活躍したいと漠然と考えている中で、留学を上手く利用して主体的に自分のスキルを高めて自分のなりたい人物像を見出し、近づきたいと考えたためである。

まず、英語で話すという面で、留学前は英語をあまり話す機会がなかったため、簡単な自己紹介などの文章でさえ話す前に考える時間を要したが、今回のプログラムを通して何度も自己紹介や会話する機会を経験したおかげで、自然と話せるようになった。特に、話す中での繋げ方を、周りの人の話し方を聞きながら学習できたことが、一番の要因である。文章で表すのは難しいが、今まで使ったことのない少しラフは"Yeah"などを使うと、会話らしい自然な英語が話せた。また、相手の話を聞いている際の相槌や、分かったという"I got it"など、会話らしい受け答えの英語を身に着けることができた。

しかし、授業を通して、教授が何を言っているのかが分からなかったり、スライドを見て初めて何となく内容を理解したり、授業後にバディに LINE で授業内容の確認などをした。このプログラムを三週間経験して英語に聞きなれ、バディ達の class activity での会話などは聞きとれるようになったが、授業で教授が話していることを 100%聞き取ることはできなかった。教授によって聞き取りやすさは異なるが、やはり少し訛りのある英語だったり、専門的な用語が一つでも出てきたりすると、より一層理解するのが難しかった。

一方で、日本で一度受けたことのあるテーマの授業では、マレーシアから見た独自の見解を知ることができた。具体的には、Gender Studies において、日本では全く触れることのなかった宗教で見るジェンダーというのがとても斬新だった。言われてみれば気付けることでもあるが、マレーシアならではとも言える宗教内での男女差別など新たな知見を得ることができた。また、class activity ではお互いの文化を紹介する企画が殆どであったが、お互いに優劣をつけることなく、むしろ楽しんで文化を共有することができた。また、その様

な授業や class activity での交流で、自分から積極的に話したり、議論に参加したりすることに対する不安や心配から脱することができた。これは、マレーシアの教授やバディの働きかけもあったおかげでもあるが、初回の授業で発言してみたり、スライドを音読したりすると、教授やバディが喜んでくれたことが大きい。人数が少ないこともあったが、今まで淡々と zoom で何人かが発言しているだけの環境からしてみると、簡単なことを発言しているだけでも、真剣に相槌を打って聞いてくれ、受け答えしてもらえるのがうれしいと感じ、発言や議論をすることに臆する気持ちがなくなった。

オンライン留学を通して、普段使わない英語での学習は、自分の英語能力ととことん向き合い、試行錯誤できる充実した時間になった。たとえ知識や思考の面において他の学生に及んでいなくても、自己理解を深めるにつれ、次第に自分なりの強みや改善点を見出せた。また、他大学からも学生が参加していたことは、オンライン留学に参加する上で非常に大きな意味があった。出身も専攻も異なる学生と話すことで、様々な価値観やバックグラウンドに触れることは大変刺激になった。日本と海外の文化を対比させることで、楽しみながら様々な価値観を勉強し、今までにない方法や内容の授業を受けることは、自分にとって挑戦することであり、自分が変わるきっかけになったと思う。このオンライン留学によって留学の楽しさを実感し、今後の英語学習や国際交流への意欲が向上した。

マレーシアに留学するということ — 英語圏ではない国へ行くべき理由 —

法学部 1 年 清水悠乃

一般的に「留学」というワードから想像する国といえば、おそらくイギリスやアメリカ、オーストラリアといった主要の英語圏がほとんどだと思う。英語を運用する機会を探しているのであれば尚更だろう。私自身、これまで一度も接点がなく、かつ非英語圏であるマレーシアへの留学は募集要項を見るまで全く念頭になかった。しかし、今回 SoSHIP プログラムへの参加を決意し、実際に 3 週間の研修を通して、当初抱いていた“留学＝英語圏”という概念が大きく覆された。本稿では、非英語圏へ留学することの意義とメリットに焦点を当てながら、私が当プログラムで得た学習成果について述べる。

まず、マレーシアの魅力の一つに民族的・文化的な多様性が挙げられる。公用語はマレー語だが、英語、中国語、タミル語といったさまざまな言語が日常で使われる。初日の自己紹介で、マラヤ大学からの参加学生の全員が 2、3ヶ国語が堪能なマルチリンガルであると聞いたことが印象に残っている。日本人が人口の大多数を占める日本では想像し難いことだが、彼らは日常的に言語を使い分けて使用しているらしい。SoSHIP では母国語が英語ではない学生同士が、英語を言語ツールとして共に授業を受ける中で、共通語としての英語のグローバルさ・便利さを実感すると同時に、「英語のネイティブではない」ことが言い訳とし

て通用しない学習環境に身を置くことで自主的にコミュニケーションを図ったり、授業で恐れず発言したりすることに繋がったことも大きな利点に感じた。例えば、Politics and International Relations の授業で戦争関連の用語が英語ですぐに出てこなかった時、私の乏しいジェスチャーを頼りに、マレーシア人のバディも一緒になってその言葉を探し当ててくれた。お互い英語が母語ではないからこそ、英語を使用する上の困難を分り合い、同じ土台の上で対等に交流できるメリットを感じた。

参加した他の日本人学生も強調している点ではあるが、SoSHIP プログラムの特徴として、現地学生の熱心さ、フレンドリーさを取り上げたい。コロナ禍においてオンライン形式の開講となった当プログラムが非常にやりがいのあるものと感じられたのは、あたたかく受け入れてくれたバディらの存在が大きいだろう。とりわけ、授業中のディスカッションや授業外のアクティビティ企画を通して良好な関係が築けたと思う。互いの文化や慣習について話し合う際、日本の文化を如何にして相手に説明するか、さらに興味を持ってもらうかという点を入念に考え、実践する機会も多々あった。このような点から、英語圏ではないからといって制限されるものは特に考えられず、むしろ自分が今まで知らなかったことを多く吸収できるという点で非英語圏への留学はもっと有意義なのではないかと考えるまでに至った。

なかなか接点がない上、英語が公用語ではない国に所在する大学のコースで、英語で授業を受けるということにはどこか矛盾を感じるかもしれない。勿論、英語の運用能力を上達させる近道は、英語圏への留学と考える人が多いかもしれない。実際、長期留学ならば、研究機関として優秀な英語圏に所在する大学を選択することに間違いはないと思うが、英語を運用する機会・国際交流を目的とする短期の留学希望であれば、敢えて非英語圏への留学を選択することには大きな意味があると思う。私は今回の研修を通して、英語力の向上だけでなく、言葉の壁を超えて様々なバックグラウンドや価値観を持つ人と積極的に交流する姿勢と意欲が身についたことを実感している。今後も英語という言語の括りに縛られるのではなく、自身の興味の赴く色々なところで学びを深めたいと思っている。本稿を読まれた人にもぜひ非英語圏への留学を前向きに検討してほしい。

英語と知識と異文化理解

理学部 1 年 丸山満ちる

私は、もともと長期の海外留学に興味があった。それに向けて、何か夏休み中にできることはないかと考えていたところ、SoSHIP というオンライン型海外研修があることを知った。

初めに、私が SoSHIP に何を期待していたのかを書く。参加の動機は、英語力の向上と知識量の増加の 2 つであった。まず、実用的な英語を身につけるには、英語で学ぶのが 1 番

だと思っている。よって、この SoSHIP は英語力の向上に最適だと考えた。さらに、知識量の増加については、人文学の授業が受けられる SoSHIP ならではのと思う。これは、専攻分野が理系の私にとって、人文学を学べる絶好の機会であった。

次に、前で述べた 2 つの目標がどれくらい達成されたのかを書く。英語で授業を受けるのは、予想通り英語力の向上に繋がった。また、授業を受けてみて、実際に生活するとなると、必要なのはアカデミックな英語だけではないと気が付いた。そのため、現地の学生が、先生または他の生徒と話すときに、どのような言葉を使っているかを知れたことも良い学びとなった。このプログラムを通して、よく参考書で見るとような言葉遣いだけでなく、「生活の中での英語」に触れられたことも大きな収穫だった。

また、知識量の増加についても達成できたと思う。私は今回、Gender Studies と Media and Society を受講した。Gender Studies では、「宗教とジェンダー」というトピックが最も印象に残った。先生も生徒の多くもムスリムだったため、これまで身近でなかった生の声が聞けたように思い、非常に興味深かった。ここに、マレーシアの大学で授業を受けるということの魅力があるとも思った。また、Media and Society では、先生がとてもユーモアのある人で、授業内のディスカッションがとても楽しかった。

最後に、あまり期待していなかったにもかかわらず、多くの学びが得られたことを書く。それは、異文化理解である。正直始まるまでは、オンラインでの開催で、どこまで異文化に触れられるのか、という点にはかなり疑問があった。しかし、実際にはオンラインでもバディと沢山話し、お互いの価値観について知ることができたと思う。現地に行けないとしても、実際に話すというのはとても大切なのだと実感した。そして、オンラインであっても、国境を超えて大切な友達を作れるというのは大きな発見だった。

これを読んでいる人の中には、現地研修型留学に興味があるが、ついていけるか不安だという人も多いと思う。自分もその 1 人だった。しかし、この SoSHIP に参加したことで、自分の英語力に自信が付き、さらなるモチベーションにも繋がった。それを踏まえて私は、まずはオンライン型海外研修で、自分の実力を試してみることを強くお勧めしたい。